

第5章

ランガチラの誕生とアヴァイキの夢

—クック諸島ラロトンガ島の—地域指導者
を通してみたMIRAB社会の国家像—

はじめに

本章の目的は、クック諸島 (Cook Islands) ラロトンガ島 (Rarotonga) の、ある男性地域指導者のライフヒストリーに焦点を当て、その詳察を通じて彼が指導者として社会的地位を獲得していく過程と彼の抱く国家観を分析することにある⁽¹⁾。以下で対象とするその人物は、現在「伝統的な」リーダーの一人としてラロトンガ社会に広範な影響力を及ぼし、またクック諸島政府官僚としても要職にある。しかし、ラロトンガ社会において理念的とされる伝統的リーダー像と彼の個人的背景から導出される実像との間には多大な齟齬が存在する。これは、あえて外来の研究者が指摘するまでもなく、彼自身そして彼を支持する人々が従前より熟知している社会的事実である。本章が課題とするところは、単に社会変化に伴って生起する理想と現実の乖離、あるいはその乖離を包摂する「新たな伝統」の創造過程を指摘して、当該社会・文化の非本質論的側面を暴露することではない。むしろ、齟齬を前提としたリーダーが誕生しえた社会的背景とそこで彼が採った実践的戦略を捉え、クック諸島というポリネシア新興小島嶼国家 (正確にはニュージーランドの自由連合国) にある「マオリ社会の現在」を把握する一助を求めることにある。

一個人と国家・社会を直截に接続して考察することにはもちろん無理があ

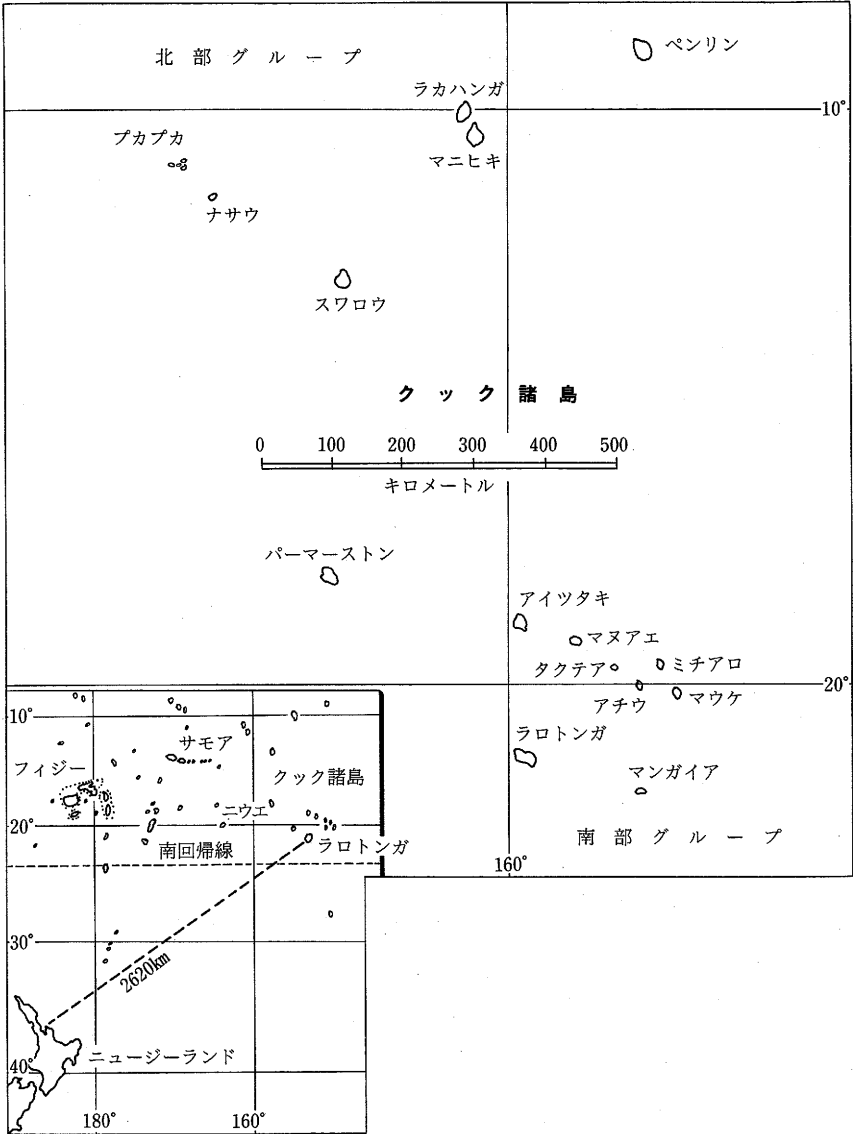
る。しかし、ある特定の制度的状況に生きる個人の生活経験の軌跡を解きほぐし、そこにどのような社会的諸要素が絡み合い、それを前提にどのように出来事が構造化されてくるかを読み取っていくことは可能である。そして地域指導者が自分の置かれた国家に対して、あるイメージを抱くという行為も、生活経験において誘発される戦略的実践の一つに位置づけて解釈したい。

第1節 クック諸島と分散する国家の背景

1. 植民地的状況

クック諸島はポリネシア中央部、南緯8度から23度、西経156度から167度に分布する15の島々から成る(図1)。陸地面積は237平方キロ、人口1万8617人(1991年センサス)の小島嶼国家である。人口の大部分はポリネシア系先住民(マオリ)であり、英語とラロトンガン・マオリ(Rarotongan Maori)語を主要言語とする⁽²⁾。1888年に現在首都アヴァルア(Avarua)を擁するラロトンガ島がイギリス保護領となり、1901年にクック諸島はニュージーランドに併合されて、植民地統制が強化された(Gilson [1980], pp. 96ff参照)。1957年植民地政府内によく立法委員会議(Legislative Assembly)が設立されたが、それまでのニュージーランド植民地政府は「無関心と不条理」に満ちた対応を続け、包括的な開発計画を欠いていたという(Bellam [1981], pp. 13-14)。1962年ニュージーランド政府は立法委員会議に対して諮問した後、64年には満場一致でクック諸島の法規改正と自治権獲得が可決された。そして1965年8月4日、外交と軍事防衛をニュージーランドに依存することを前提にクック諸島はニュージーランドと自由連合関係にある自治領として独歩を始め、アルバート・ヘンリー(Albert Henry)が初代首相に就いた。1983年にクック諸島政府に外務省が開設され、85年には首相兼務で防衛大臣職が生まれたが、現在も外交・防衛はニュージーランドの庇護のもとにある

図1 クック諸島



(出所) 近森編 [1990], p. iii (一部改変)。

(Crocombe [1989], p. 231)。また自由連合関係を背景にクック諸島民は生まれながらにクック諸島とニュージーランドの二つの市民権を獲得することができ、労働移住などに対する法的規制もないために、その恩恵に浴している。

以上概観したように、クック諸島の現在は功罪取り混ぜてニュージーランドとの関係史のうえに成り立っている。パートラム (I. G. Bertram) とワターズ (R. F. Watters) が指摘するように、1940年代以降はニュージーランドの「福祉国家的植民地主義」(welfare state colonialism)のもとでマオリたちの依存意識は高まった (Bertram & Watters [1985], p. 507)。1950年代の報告では、クック諸島民はニュージーランドの援助に依存して菜園を見捨て (Cumberland [1954], pp. 260-261)、行政が地域社会内での開発自助を支援する役割を放棄しているという批判もみられる (Belshaw & Stace [1955])。クック諸島の主要輸出品目であったコブラ、柑橘類、バナナについても、1920年代後半から50年代にかけて生産量が10%から55%減少している (Crocombe [1962])。1960年代にはこの傾向に一層拍車がかかり、輸送手段の不整備、市場の不安定性を背景に換金作物のリスクの高さと低収益が強く認識され、農業離れも深刻化してくる。同時にニュージーランドの植民地経営方針も社会開発と公衆衛生・教育・道路などの基盤整備に重点を移し、農業経済開発を軽視する傾向に走った (Johnston [1967])。

その反面、ニュージーランドからの援助額は1946年から50年の5年間と51年から55年の5年間を比較しても2倍に膨れ上がっており、温情主義的植民地行政が依存型社会を造り上げていった跡がうかがえる (Bertram & Watters [1986], pp. 53-54)。一方、援助の受け皿としての官僚制度も並行して急速に肥大化していく。1951年に公務員数は430人で、大多数は白人であった。それが1961年には813人と倍加し、66年には1464人、81年には1916人と継続的に増加している (Watters [1987], pp. 44-46)。クック諸島マオリが脱植民地化を強く志向しつつも、援助との関係で官僚制度だけが肥大化し、そのために内政自治に先立つ政治システムの熟成には逆に遅れをとってしまったといえる。

2. 移 民

「福祉国家的植民地主義」が進行するなか、社会現象としては労働移民の大量輩出が起こった。1914年から18年の第一次世界大戦時にラロトンガでニュージーランド軍の徴兵が行われた。クック諸島全域から500名近い志願者が出て、多くのマオリがニュージーランド兵としてエジプト、ヨーロッパの戦線で戦い外地で命を落している (Gardiner [1992], pp. 12-22)。また1942年から55年にかけてソサエティ諸島(Society Islands)マカテア島(Te Makatea)の燐鉱石採掘のために、フランス系の鉱山会社に雇われて2906人のクック諸島マオリが彼の地に労働移動した (Curson [1973], pp. 17-25)。マカテアでは当時最低年収592NZドルが保障され、既婚者は収入の3分の2以上を家族に送金することが条件づけられていたといわれ、その経験が後の送金経済の基礎を作ったと一般に考えられている。

第二次世界大戦時には直接の戦闘要員としてよりも、徴兵で若年労働力が枯渇する国内経済を支える目的でニュージーランド政府が打ち出した労働補充計画に基づいて多くのクック諸島マオリがニュージーランドへ移住した。センサス資料によれば1936年には103人であったニュージーランドのクック諸島マオリは、45年354人、56年2320人と確実に増加している。1965年の内政自治権獲得前後と74年のラロトンガ国際空港整備による定期便の増加で、移住の流れは一層活性化し、その数も66年8663人、71年1万2913人、76年1万8610人、81年2万4045人、86年3万87人、91年3万7857人と爆発的な伸びを示し、ニュージーランドのポリネシア系移民のなかではサモア人に次ぐ規模となっている (New Zealand Department of Statistics [1992])。並行してセンサス資料では拾えないような短期の還流的人口移動を繰り返すタイプの季節労働者、学生も相当数にのぼり、クック諸島マオリは母社会とニュージーランドの双方を視野に入れて現在の生活圏を形成するに至っている。人口学的にはニュージーランドにその社会的重心地が移ってしまったと表現してよい。

また移住者の中には30数年を超えて定住する第1世代も多く、1991年のセンサスではニュージーランド在住者のうち1万2000人ほどは両親がクック諸島マオリでありながらニュージーランドで生まれた第2世代以降となっている(棚橋 [1993], pp. 3-4)。そして、この社会的な「根の転倒」とでも呼びうる状況に、クック諸島で生起する様々な社会過程とそれが抱える社会問題の核があるといえる。

3. MIRABプロセス

パートラムとワターズはこうしたクック諸島社会の現状を指して、MIRAB社会の典型例と捉えた。MIRAB社会とは移住 (migration)、送金 (remittance)、海外援助 (aid)、官僚制度 (bureaucracy) の頭文字をとった造語で、移民による送金と海外援助から成る「レント型収入」が、肥大化した官僚制度を通じて分配され、経済基盤が支持されるような社会体制を意味する (Bertram & Watters [1985], pp. 498-500/佐藤 [1993])。またこの4要素が連関して展開される社会過程をMIRABプロセスと呼ぶ。クック諸島も1901年の植民地化以来の歴史的経緯に基づいて移民経済を醸成してきたように、現在のオセアニアに広範に認められるMIRAB社会体制は過渡的というよりも極めて持続的現象である。MIRAB社会研究は経済政策論の立場から小島嶼国家の社会経済的変化の過程を外部勢力への地域的順応と捉え、これを所与として太平洋の新興国家の近代化の条件は安定した「レント型収入」を得るために従属傾向を増大することにあると結んでいる (Bertram [1986])。MIRAB社会モデルは一般的な経済変化を捉えるには有効であるが、フーパー (A. Hooper) がニュージーランド自治領トケラウ諸島 (Tokelau) の研究で指摘したように、社会経済変化の過程自体を所与としてやり過ごすことには幾つかの問題点がある (Hooper [1993])。先ず第1に、MIRAB社会モデルは社会経済的変化の過程を外部勢力への順応過程であると一義的に捉える傾向があるために、移民・送金・援助・官僚制度が地域社会レベルにもたら

す生活様式の内的変化とその連鎖、そして4要素の内在化の結果である社会＝文化的転換の過程を見過ごしてしまう。第2に、社会経済的変化が円滑で累積的かつ適応的であるとのみ仮定して現状分析を行うことはかなり危険である。第3に、MIRABプロセスが生起するところの広範な社会＝政治的脈絡の考察を怠っている。以下本章ではこの三つの問題点を念頭に置いて、MIRAB社会に生きる、ある地域指導者のライフヒストリーを詳察し、移民、送金、援助、官僚制度が複合的に絡み合いながらもたらす社会＝文化的転換過程の実相について考察する。併せて、クック諸島を取り巻くグローバルな社会＝政治的脈絡が如何に地域において認識・流用され、MIRAB体制下の社会と国家の在り方が模索されているかを指摘する。

第2節 動かなかった男

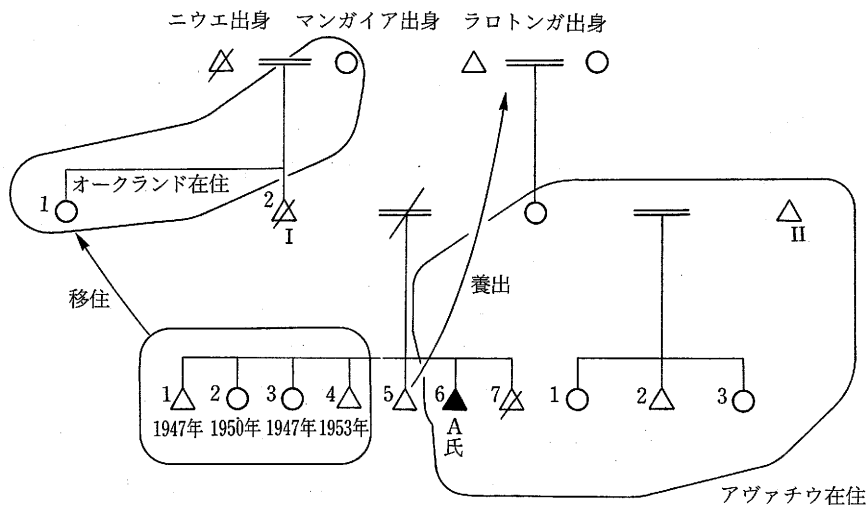
これから論じるライフヒストリーの主を仮にA氏とする。A氏は1943年10月31日にクック諸島ラロトンガ島の首都アヴァルア市、ルアトンガ村(Ruatonga)に生まれ、96年現在で53歳を数える。彼は母語のラロトンガ・マオリ語に加え英語に堪能である。幼少期をルアトンガ村とそれに隣接するアヴァチウ地区(Avatiu)で過ごし、爾来彼はそこを生活世界の「臍の緒」(*'enua*)として住み続けている。前節で概観したように、クック諸島マオリの世界はニュージーランドとの間の人口移動を社会経済的基盤として成立してきているが、そうした流れに乗るよりも、彼はむしろ「根」(*tumu, pū*)としての役割を果たして生きてきた。現在のA氏は政府上級官僚であり、有力な称号を継承する地域の「伝統的」リーダーでもある。A氏が何者かを表現する言葉は他にも多々あるが、その生活の軌跡を聞くなかで現れてくるキーワードを選択するとすれば、それはMIRAB社会に在っても「動かなかった男」である。以下の各節では、このキーワードを軸に、生い立ちから現在までの軌跡を見ていくことにする。

1. メツアとして

A氏が3歳の時に父親が死亡し、母は再婚している。そのため最初の父親についての記憶はほとんどなく、子供の頃の思い出という、継父と兄弟姉妹の争いごとなど葛藤の記憶で埋め尽くされているという(図2参照)。

A氏の実父方の祖父は、ニュージーランド行政下で1901年から1904年までクック諸島に領属していたニウエ島(Niue)の出身である。彼は宣教師としてクック諸島マンガイア島(Mangaia)を訪れ、その女性を娶り、その後ラトonga島へと移住した。A氏の母方の祖父はタヒチの華僑系を出自の一つとするが、ラトongaの生まれであり、同島アロランギ地区(Arorangi)の最高位首長称号ティノマナ・アリキ(Tinomana Ariki)を継承するラインの傍系

図2 A氏の出生家族



- (注) (1) 数字は同世代内の出生順位。
- (2) 主要人物のみ記載し、一部省略してある。
- (3) 年号はニュージーランドへの移住年。
- (出所) 筆者作成。

親にあたる。

母の最初の結婚による兄弟姉妹はA氏を第6子として7人おり、第1子から第4子までは何れも現在ニュージーランドに居住している。A氏の直ぐの兄である第5子は母方の祖父の家に出生直後に養取され、アヴァルア在住である。弟は既に他界している。また、母の2番目の結婚による異父兄弟姉妹は3人おり、いずれもA氏より年少である。

ニュージーランドに住む兄姉は実父の死亡直後に移住したものである。A氏がまだ幼い頃に、長男と次女(1947年)、長女(1950年)、次男(1953年)と相次いでオークランド、ウエリントンに向かい、ラロトンガを後にした。この兄姉たちは何れもオークランド在住の実父の姉を頼りに移住した。彼女は1940年代にニュージーランドが打ち出した未熟練労働者確保のための移民計画に基づいてオークランドに渡り、洗濯婦として働いていた。彼女は父、つまりA氏の実父方の祖父の死後、母も呼び寄せて彼の地に生活基盤を形成したのである。

A氏の兄姉はニュージーランドでそれなりに成功を収め、長兄と長姉は現在では定年を迎えてオークランドで悠々自適の生活を送っている。また、次姉は教員として、次兄は会計士として、やはり同じオークランドにいる。

A氏の回想では、この兄姉たちがラロトンガを離れたのは、同世代の多くの若者がニュージーランドに雇用機会を求めたという時代の雰囲気流されたものの、継父との葛藤が大きかったことによる。彼らはニュージーランドで生計を立てていくと同時に、ラロトンガに残した家族も扶養すべく、不定期ながら送金をしていた。

1940年代後半から50年代前半というのは、第二次世界大戦の様々な影響が参戦国の国内情勢に顕在化していた時期である。特に兵士として多くの若者を外地へ送り出していたニュージーランドは、戦中・戦後と深刻な労働力不足に直面し、兵士が帰還するまでの「つなぎ」の労働力を補給する先として植民地であるクック諸島、トケラウ、ニウエ、西サモアなどの存在に着目していた。クック諸島などからの安価な労働力は、戦後ニュージーランドが酪

農牧畜業の振興によって「ヨーロッパの食糧庫」としての位置を獲得しようとする流れにそって、関連業種に投入された。男性の多くは季節労働の農夫、港湾労働者（冷凍マトンの積み下し）となり、女性の多くは洗濯婦やハウス・メイドなどの仕事に就いたという。

A氏も青年期を迎え、ニュージーランドへの出稼ぎを考えなかったわけではない。安価な未熟練労働者として、港で「カスのような賃金労働を漁る」ことから「かもめ」(seagull) という名で蔑まれるとしても、海外での雇用機会と現金収入、そして都会での様々な経験を享受できること自体は極めて魅力的に思われたという。しかし、A氏はニュージーランドへの労働移住を逡巡せざるをえなかった。

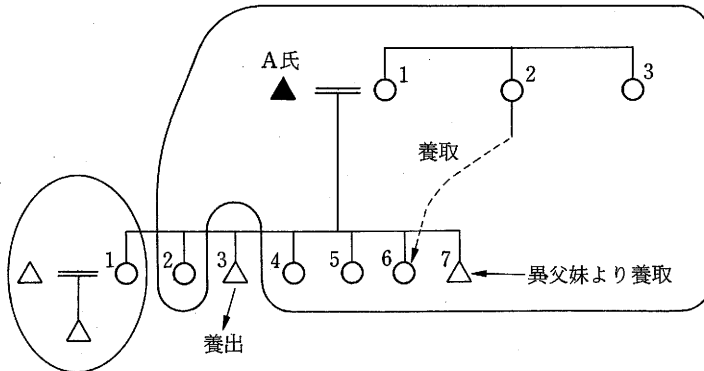
彼自身の説明では二つのことが、「動かなかった」理由として挙げられている。先ず第1には、他の家族成員のとった選択との葛藤である。A氏は母と実父との間に生まれた第6子であり、彼が10歳になるまでに兄姉4人は継父との葛藤と経済的動機を主な理由にニュージーランドに移住してしまっていた。またすぐ上の兄は出生直後に養出されていた。さらに継父の連れ子は3人ともA氏より年少であり、兄姉が社会的・物理的に離れた後では、A氏が言わばこの世代の年長者として行動することが要求されてくる。つまり、A氏は、多くの青年がクック諸島を離れてニュージーランドでの生活経験をスタートさせる時期にその機会を全く逸したのである。

第2に、A氏が「文化的な理由」と呼ぶものがある。前述のとおり、A氏は兄姉が海外移住を選択するなかで、残留を余儀なくされ、日常生活において実質的な年長者の役回りを果たさざるをえなくなった。ラロトンガ社会では理想的には直系の男性長子が世帯のリーダー、すなわちメツア (*metua*) として立ち、称号などの継承、土地所有権および用益権に関する紛争の調停、様々な資源の管理・配分に関する責任、そしてその他の社会的な代表権を負うとされる。「残された長子」としてのA氏は、この社会的理念を十分に理解しつつ、労働・食物などの提供により扶養義務を果たしメツアの役割を務めてきた。そして「一度メツアとなれば、その者は生涯メツアである」と彼は

いう。

A氏には1968年、25歳のときに結婚したマンガイア島出身の妻との間に5人の子がいる(図3参照)。現在の彼の世帯にはその5人の子のうち20歳から23歳の3人の娘が同居し、精神障害をもった2人の妻の妹もマンガイアから来島し同居している。さらに、2人の子を養取しているが、その1人は同居する妻の妹の娘であり、もう1人は異父妹の息子である。A氏はこうした世帯成員を扶養し、近隣に住む実母も世話しているが、彼によればこれは「中心にいる男」としてのメツアの責任である。メツアとしての彼は、自分が「世話」をしなければならない範囲を、プナ (*puna*, 核家族に相当)、カインガ・タンガタ (*kāinga tangata*, 同居世帯成員)、コプ・タンガタ (*kōpū tangata*, 双系的な広がり親類)、さらに地域社会 (*tapere*) であると捉えている。そしてなにがしかの社会的・生得的特権性において「メツアであること」よりも、それに伴う社会的責務とその遂行において「メツアとなった」ことに彼の自己認識の力点が置かれている。実際にA氏は双系親や姻族、あるいはその知人で島外から訪れて来る者にも「世話」をしており、結婚後だけ数えてもマ

図3 A氏の同居家族



- (注) (1) 数字は同世代内の出生順位。
 (2) ダイアグラムは1994年現在の状況を示す。
 (出所) 筆者作成。

ンガイア島やアチウ島 (Atiu) からのコプ・タンガタを中心に15人を今まで同居させて扶養し、彼らの希望に沿ってニュージーランドに送り出してやっている。社会学的にみれば、A氏の世帯は「乗り換え世帯」(makeshift householdないしtransit household) の典型例であり、クック諸島の離島部から首都アヴァルアに出てきた者に社会的保護と都市的生活様式への適応機会を提供し、さらに財政的な支援も含めてニュージーランドなどへの移住を促すような段階的移住の中継点として機能してきたことが指摘される。

しかし、「これがコプ・タンガタへの献身であるし、コプ・タンガタを支えていくものなのだ」とA氏がいうとき、「動かなかったこと」が必ずしも不可避的な犠牲のストーリーだけで構成されたものではないことが分かる。この点は後節のヴァカ・プロジェクトとの関連で改めて指摘するが、そこには「残されて長子になった男」が目論む、社会関係資本形成のための戦略を同時に読み取ることができる。

2. 政府官僚として

A氏は初等・中等教育をアヴァルアのカトリック系聖ヨセフ校 (St. Joseph's Catholic School) で受け、1959年にそこを修了してからはその才を認められて1年余り母校で数学科教員を務めている。その後1961年から62年にクック諸島貿易会社 (Cook Islands Trading Company) の店員を経験した。そして、内政自治に向けて官僚制度が肥大化を始めた1963年から現在に至るまでの30余年、政府官僚の任に留まり着実に昇進を重ねていった。その間、政権は各々3派閥から成る民主党 (Democratic Party) とクック・アイランズ党 (Cook Islands Party) の二大政党の間で交代と連立を繰り返し、政権交代は通常著しい官僚の異動を伴った。彼自身「自分はメツアであり役人であるが、役人は政府が替れば交代させられてしまう」というものの、こうした流動的なクック諸島の政治基盤にあってその在職期間は異例の長さである。

1965年の「独立」、つまりクック諸島がニュージーランドの自由連合国とな

り内政自治権を獲得した前後は、学校教育の場においても白人教師がマオリの青年たちに向かって海外に出ることを勧めていた時期である。A氏と同世代の母方のイトコで、現在やはり官僚職にある男性は、「この新しい国の未来のためには海外を見てきた方が良いのだ」というイギリス人教師の「独立」前夜の言葉を強く心に留め、仲間5人と汽船でラロトンガを後にした経験を述懐している。しかし、同じくこの発言を耳にしたA氏は、この誘いにも乗らなかった。当時20歳を少し過ぎたばかりの彼には既に「根」としての自覚の方が強かったという。彼自身が指摘するメツアとしての「文化的理由」の故であろうか。

官僚としてのA氏の足跡は主に次のようなものである。彼は1963年に当時準備段階にあった政府の社会福祉と青少年問題を扱う部局に一介の担当官として職を得た。2年後、総理府内の立法・選挙管理部門に勤務先を移したが、その数学の才能と機知を認められて同年総理府内に新設された統計部局に異動し動態統計調査担当となった。それ以来、1971年の第1回国民センサスの実施に係わるなど一貫してこの部門の仕事に身を置いている。その間、彼のいた部局は総理府の管轄から独立し、1982年にはその勤務機関においてクック諸島マオリとして初の主任官吏となって現在に至っている。

彼の中央官僚としての地盤形成にはある種の偶然性も介在したであろうが、それを逃さない才覚と新興国政府部内での状況が微妙に絡みあって実現したものといえる。A氏は専門的な高等教育を受けることはなかったが、実務においてその経験を蓄えていく貪欲さを持ち合わせ、さらに手を染めることになった職種の専門性の高さから1965年以来現在までほぼ一貫して同じ部門に配属されている。クック諸島は「独立」以降、様々な制度的転換を遂げるが、新たな国家的基盤の整備において統計手法もその統治術としての重要性を正当に評価されてきており、当該機関のリーダーであることから派生する社会的評価もかなり高い。特に「独立」以来英連邦派遣の白人専門官が務めてきた主任官吏の仕事にA氏が登用されたことは、彼自身そして彼の親族にとって多大なる威信をもたらした。そして、伝統的な称号を持たないけれども彼

は分節リネージの長(キアト)に相応しい男であるという認識が親族内で次第に一致するところとなっていた。

1976年以降はA氏が職務上海外へ出張することも頻繁になり、1979年にはアメリカ統計局とジョージワシントン大学主催の人口行政に関するセミナーに政府代表として参加したほか、訪問した地域もオーストラリア、ニュージーランド、ハワイ、フィジー、西サモア、ヴァヌアツ、仏領ポリネシア、ニューカレドニア、インドネシア、日本、スリランカ、バングラデシュ、イギリス、スイス、ケニアと多岐にわたっている。若い頃に「かもめ」としてニュージーランドに出た経験がないことと、現在「政府を代表して」海外に赴く地位にあることは特に威厳をもって彼が語る内容である。

第3節 リーダーシップと称号

ラロトンガ社会は、「伝統的なもの」(*mei pō mai*)も「新しいもの」(*'akarava*)も含めて、称号(*tā'onga*)が極めて重要視される世界である⁽³⁾。A氏は政府上級官僚という「新しい」称号を持ち、そして現在では同時にランガチラという「伝統的な」称号も継承するに至っている。A氏の事例の分析に先立ち、本節ではまず調査で得た知見に基づいて、ラロトンガのリーダーシップと称号の一般的素描を試みたい。

ラロトンガにおける主な称号は、草分け筋で最高首長にあたるアリキ(*ariki*)、かつてアリキの戦士長であった家系に継承されるマタイアポ(*mata'iapo*)、アリキおよびマタイアポの年少の傍系に継承されるランガチラ(*rangatira*)、公的な場での発言を許されないアリキの「声」の役割を果たすヴァア・トゥアトゥア(*va'a tuatua*)、アリキ直属の司祭であるタウンガ(*ta'unga*)に分類される。個々の称号には固有名があり、同じランガチラでも継承ラインの系譜上での分節順位にほぼ基づいて称号の優劣関係が設定されている(Crocombe [1964], pp. 25-37)。またアリキ、マタイアポなどの上位

の称号保持者は祖先神と人間界の媒介者として伝統的には位置づけられてきた。

ラロトンガ島は大きくテ・アウ・オ・トンガ (Te-Au-O-Tonga), タキトゥム (Takitumu) ないしンガタンギア (Ngatangiia), アロランギ (Arorangi) ないしプアイクラ (Puaikura) の名称で呼ばれる三つのヴァカ (*vaka*) に分かれている。ヴァカとは元来「うつろ」, そして「割り貫いて作ったカヌー」のことであり, それが転じて「同じカヌーに乗って来島した者」, 「出処を同じくする者が住む場所」, 「部族集団」を指すようになった語である。ここでいうヴァカは, 特に各アリキとの系譜的關係を基点に境界が設定される最上位の社会集団およびそのテリトリーを意味する。ラロトンガにはテ・アウ・オ・トンガのマケア・ヌイ (Makea Nui), マケア・カリカ (Makea Karika), マケア・ヴァカチニ (Makea Vakatini), タキトゥムのパ (Pa) とカイヌク (Kainuku), アロランギのティノマナ (Tino-mana) というように合わせて六つのアリキ称号があり, その継承者6名がいる。

アヴァルア市を中心とするテ・アウ・オ・トンガのマケア・ヌイ・アリキを例にとると, その統制下に10のマタイアポ称号と八つのランガチラ称号, ヴァア・トゥアトゥア称号一つ, タウンガ称号一つがあるとされる。理想的にはこうした称号は一つのアリキ称号を頂点に, アリキの年少ラインとして派生したランガチラ, マタイアポ, マタイアポの年少ラインとして派生したランガチラの順位で階層化される。しかし, アリキ系のランガチラとマタイアポの優劣関係は極めて微妙で, ラロトンガ内でも地域的な差異が存在する。一般に各称号クラス内では, 初代称号保持者の出生順位とその人物を基点とするリネージの分節順位に基づいて称号間の社会的地位が序列化される。ヴァカに対して, リネージ・レベルの社会集団はンガチ (*ngati*) と称される。このンガチは各レベルの称号継承ラインの直系親を核に, 更なる傍系親の分節を理論上繰り返していくため, キアト (*kiato*) と呼ばれる称号を持たない者を長とする下位リネージ (これもンガチという) が形成されていく。またンガチを構成する拡大家族的な世帯 (ウアング, *'uānga*) の長はメツアと呼ばれる

が、このメツアとキアトの実相については、A氏の生い立ちに絡めて既に説明している。

通常、称号保持者はリネージ長となり、他のキアトやメツアを掌握して、かつてはタペレ (*tapere*) という一定区域の土地および資源の用益権も行使したとされる。したがって、上述のような称号の階層的構造において、アリキはそのヴァカ全体を、下位の称号保持者は当該ヴァカ内の特定ンガチを統制する社会体制があったと仮定される。しかし実際に辿りうる範囲では、アリキを頂点とする全島の社会経済的集権構造が堅固に形成されていたというよりも、各区域内にあつてはマタイアポ、ランガチラによる自治性が比較的高かったと同時に、極めて競合的な関係が存在したと考えられる。各区域内の出来事に関してはアリキよりも下位の称号保持者であるリネージ長、さらに各世帯内では世帯長であるメツアの発言権と決定権が秀でており、アリキは自分に関係するマタイアポとランガチラ間の、マタイアポとランガチラは下位レベルのンガチおよびメツア間の、メツアは世帯内の、というように各々意見調整を行って合意に結び付けていくという政治的機能を主体とするものであったと考えられる。また土地紛争に関しても、一つのタペレを越える範囲に対象が拡大しないかぎり、アリキの出る幕もなかった。これを支持するように、「このタペレにはマタイアポしかいない。アリキがいるのはあのタペレである」という表現もよく用いられる。またアロランギのあるマタイアポは、「アリキは自分のランガチラには命令を下せるが、マタイアポには命令を下せない。マタイアポは自分のンガチを抱えている。だから、アリキはマタイアポに尋ねることはできる」と自らの位置づけを語っている。この二つの言葉は称号間の特徴をよく捉えている。

ラロトンガでは個々の称号継承とリーダーの選出において、直系男性長子を第1位の継承者とする。しかし、継承可能な者の幅は柔軟にとり、その数名を競合関係に置いて観察する傾向が共通して指摘される。その結果は双系親や姻族まで広範に巻き込む親族会議 (*'uipā'anga kōpū tangata*) においてメツアたちを中心として議論され、その出席者の合意 (*'akatupe i te 'au*) を得た

うえで最終的な継承者が決定される。これが称号継承者の決定プロセスの通例である。

称号保持者の口から「称号を受け取ると命が縮まる」という言葉が漏れることがあるが⁽⁴⁾、この表現は「なにがしかの理由で現称号保持者の直系男性長子以外にその継承が成された場合、直系親からの異議申し立てが何時襲ってくるか分からず、仮眠することすらままならず命を縮める」あるいは「称号に見合った者か否かが常に周囲から監視され、そのために命を縮める」と読み込まれて解釈される。その一方で、「お前は道に出て王〔称号保持者〕になった」という表現もよく耳にする⁽⁵⁾。この「道」とは、かつて行われていたテレ (*tere*, 儀礼的遠洋航海) に関連する。テレとは水のような流れ、あるいはそれに乗って航海すること、旅に出ることを一般に示す語である。さらに、先ず行く先を見据えて、進む方向を決め、いずれは出立の地に「大きくなって」戻ってくるという一連の過程を含意する。したがって、「道」とは航海に限定されるわけではなく、該当する個人の生活経験の軌跡を隠喩的に指すものと捉えられる。

称号獲得にまつわるこの二つの言説は、前者が理念的な称号継承規則に焦点を当てて継承者を評価する傾向を示すのなら、後者は継承規則を越えても具体的行動において開示される継承者の個人的資質に社会的評価の余地を残す傾向を示すといえる。つまり、ラロトンガの称号継承者の決定過程では、この二つの言説に表現される視点の双方を包摂して、ある人間が特定の称号を有することの可否とその「正統性」が検討されていくのである。現在のラロトンガにおいてはアリキ称号を含めて女性継承者が相当数いることもこの観点から特記される。

第4節 「道」に出ずに王になった男——ランガチラの誕生

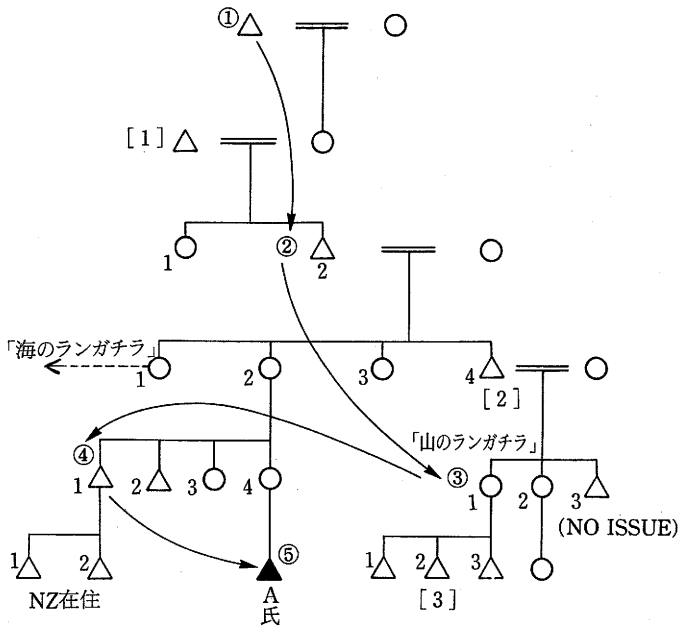
前節ではラロトンガ社会のリーダーシップと称号の一般的特質に関して述

べたが、本節ではA氏が「伝統的」称号を得るまでの過程を考察していく。彼はニュージーランドへの国際的労働移住が「道」の主要な選択肢と認識される現代のクック諸島にあって、家内の制約から「道」に出ることなくラロトンガで青年期を過ごして実質的にメツア、キアトの役割を果たし、その才覚から「新しい称号」といわれる上級官僚の地位を得た男である。そして彼は数年前にその実績を買われて伝統的称号をも継承し、広範な影響力を有する伝統的リーダーの一人と目されるに至った。

A氏が継承したのは、テ・アウ・オ・トンガにおいてマケア・カリカ・アリキの配下に位置づけられるランガチラ称号で、アヴァルア西部のタペレを中心的な勢力範囲とする。現在女性が称号を保持するマケア・カリカ・アリキの勢力下の三つのタペレには、マタイアポ称号はなく、元来その傍系を中心に11のランガチラ称号が継承され、うち一つがヴァア・トゥアトゥア役の称号とされている。そしてA氏の称号は其中でもかなり権威の高いものであるとされる。A氏の率いるンガチは、マケア系アリキたちの一族が移住してくる以前にラロトンガに移住・定着したとされ、マケア系の来島時には戦士の役割を勇猛果敢に果たして、マケアの勢力拡張に貢献したと彼はいう⁽⁶⁾。A氏の継いだランガチラ称号は、この祖先の勲功に基づいて彼の5世代前の男性に最初に賦与され、さらにその娘がマケアのラインに嫁いだ結果、ンガチ自体はマケア系の傍系年少ラインの位置づけを得たことになっている。したがって、このランガチラ称号は現在でもマケア・カリカの他のランガチラとは異なる伝統を持つという強い意識と戦士の末裔としての威信に支えられた称号となっている。

図4はA氏に対する聞き書きをもとに、彼がランガチラを継承するまでの過程を再構成したものであり、その内容はA氏が土地相続の際にクック諸島土地法廷に提出した系譜資料を参照しつつ語られたものである。図中①は初代称号保持者にあたる。本来ならその男性長子に称号が継承される訳だが、彼には娘しかいなかったため1世代飛ばして孫の②にランガチラを譲る。しかし、娘が嫁いだ男性[1]はマケア・カリカの「声」の役を果たすヴァ

図4 ランガチラの継承



- (注) (1) ①～⑤はランガチラの継承順位。
 (2) [1]～[3]はヴァア・トゥアトゥアの継承順位。
 (3) アラビア数字は同世代内での出生順位。
 (4) 主要人物のみ記載し一部省略。
 (出所) 筆者作成。

ア・トゥアトゥアの称号保持者であったため、ここで問題が生じる。継承規則上は [1] から②に称号が移動するのが理想だが、彼は既にランガチラ称号を母方の父①より受けている。そしてヴァア・トゥアトゥアの称号をそれに重ねたとしても、「闇夜からの[伝統的な]称号を二つも引き受けることは、命を縮めること以外のなにものでもない」。結局②はランガチラの継承のみに止め、「声」の称号は父から自分の長男 [2] へと流した。

しかし、②が自分の称号を次世代に渡そうとする時点で、彼は父の [1]

と同じ経験をせねばならなかった。つまり、継承規則のうえで第1位候補にあたる〔2〕は既に称号を保持しており、なおかつ、〔2〕には他に男兄弟がいなかったのである。そこで、②は孫世代への隔世的継承を考え、〔2〕の子供に候補を絞った。〔2〕には第3子に長男がいるが、親族会議ではこの男子には重要な称号を継ぐだけの力量が欠如していると判断された。仕方なく、女性だが男性ラインの長子であることから、③にランガチラが渡った。

③が称号を得たところで、予想されたようにその継承を巡って異議が噴出し始めた。それは、③のように男性ラインの長子であることを条件に女性にもランガチラの継承を認めるのであれば、一番年少の〔2〕のラインにそれを留めるよりは女性を介在させても②の子供世代の内で年長ラインに戻した方が良いだろうとするものである。②の長女はこの時点で早速、自らが正統なランガチラ継承者であることを宣言してしまい、同じ称号を有する者が2人存在する事態となった。二つに分かれてしまった称号は現在もそのまま残っている。②の長女の系統はアヴァル西部のタベレの海側に居住地を構えていたため、称号を現在「海のランガチラ」と称し、一方、現在A氏に引き継がれた③以降の称号は山側に居住地を構えていたことから「山のランガチラ」となっている。

この事態に対して正式に親族会議が開催されたのは、③の継承後1年を経たからで、会議は作法に則って③が「この称号は皆の前にある。そしてこれを直系に戻す」と宣言して称号を一時放棄することで始まった。②の長女のラインは既に独自に継承を宣言して称号を分けてしまっていたので、先ず②の次女の長男④に言葉を掛けたが、彼はその申し出を引き受けることを宣言した。その結果、ランガチラは③から④へと同世代内を年長ライン寄りに移動した。A氏の見解では、親族会議の合意を経て継承された「山のランガチラ」を「正統な」称号と見なし、「海のランガチラ」は②の長女以降も継続されてきたのでその存在は一応認めるが、かなり訝しく思っている。

ランガチラの称号が③の手を離れた後、〔2〕は力量不足の長男を避けて、ヴァア・トゥアトゥアを長女③の次男〔3〕に渡した。ランガチラの継承を

巡っては異議が出たものの、③は非常に優れた女性であり、その評価においてヴァア・トゥアトゥアの称号が③のラインの男性に継承されることには何の異議申し立てもなかった。

④は図に明らかなように、A氏の母方のオジにあたる。④には直系の息子が2人いるために、これも本来ならばその何れかがランガチラを継ぐべきところである。ところが、A氏と同世代のこの2人はそろって生活基盤をニュージーランドに移してから久しく、④のランガチラとしての活動を支持することもなかった。不在の息子たちに成り代わって、その役を果たしてきたのがA氏である。ランガチラに要求される主な役目はアリキと地域社会との間にあって、合意を取り付けて地域政治の安定化を図ることと、饗宴 (*umukai*) の折に豚、トリなどの食物を手配して揃えることである。ラロトンガにいて、④の下にあるメツアだったA氏は、政府官僚として培ってきた人脈を利用して食物調達の手配を重ね、饗宴の切り盛りもこなして、④に最大限の貢献をしてきた。その過程で彼は「伝統的」称号は有しないが極めて有能なキアトとして認められていた訳である。

④は高齢となり、その称号の継承に関して親族会議を開いてもよい時期を迎えたが、そのときには迷うことなくA氏を後継者として推した。④にとっては「道」(ニュージーランド)に出たまま何時戻ってくるとも知れない息子に期待を掛けるより、「道」に出ずして「王の振舞い」をこなすA氏を人選することは当然であったといえる。そして、この④の提案に対して当然のように、親族からの大変な反発が起こった。紛糾の第1の理由はAが④の直系ではなく、それも末妹の第6子であることによる。A氏もこれを良く理解して、自分の前に出された称号を一度、直系のラインに戻すことを親族会議で作法上宣言した。しかし、④の意向は強かった。親族会議の参加者も次第にそれに押されて、②、③、④の近親範囲(コプ・ムア, *kōpū mua*)にある者に称号が委譲されるのだから良いであろうという判断に流れて、最終合意 (*'akatika'-anga kōpū tangata*) に達した。末妹の第6子という視点からみれば、A氏は継承規則から大きく外れた候補と捉えられるが、この合議においては、直系親

の能力上の不適格性を判断したうえで、現保持者のンガチに近いンガチの中から選出された二次候補という選出視点が強調された。

A氏の個人的資質が高く評価された結果の継承であったが、親族会議においては近親者内の最年長者に一時称号を預けて直系親の帰国を待って称号継承を行うことも提案されている。さらに、A氏の継承自体が④の直系親が帰国するまでの暫定的な移行措置であると捉える者も親族内には少なからずいる。傍系親が継承預りをする代行措置は、ラロトンガでは他の称号継承の場合や土地法廷の判例記録にも散見される事例であるが、それは往々にしてその後の深刻な紛争を引き起こしている。つまり、直系親はいずれは年長ラインである自分のところに称号が返還されるという継承規則を当然のように強調するし、傍系親は代行措置ではなく親族会議での合議を経て自らのラインが継承の基点へと変換されたと解釈していく傾向は強い。現に、当該ランガチラにおいても②から③への称号継承時に称号の分裂を生じている。

A氏自身は、1992年7月12日にアヴァルアで盛大に叙位式('akata'onga)を挙行して正式にランガチラとなったことをアピールしたが、④のニュージーランドに住む息子たちの存在が気がかりである。かつてなら、称号継承よりも、未熟練労働者としてニュージーランドに留まり、低レベルながらある程度安定した現金収入とニュージーランドの老齢年金受給資格を得て老後を迎える「道」が良しとされた。しかし、ここ数年で事態は変化し、ニュージーランド経済の停滞にあわせて、ポリネシア人熟年労働者が年金受給資格取得前に巧妙に大量解雇されている。またニュージーランド政府の老齢者医療補助費削減の目的で年金受給制度に修正が施され、国外に居住している者にも年金が全額支給されることになった。つまり、長期移住者のうち、失職した者と退職後の高齢者が今後大量にクック諸島に帰還してくる事態が懸念されるのである。その場合、帰還者の間では強い称号志向を文化的背景に、相続権・用益権を含めた土地権と称号継承権が「伝統的社会保障」の一種として解釈されている。したがって④の直系親が帰国して称号の返還を提訴することも高い確率で起こりうることである。

また「山のランガチラ」の継承が傍系に流れたことに「海のランガチラ」の現称号保持者も何かと関心を示している。A氏の継承に対して疑義が生じ、再び親族会議が召集されることがあれば、この保持者もそれに加わり、年長である「海のランガチラ」のラインに「山のランガチラ」を戻して元の一つのランガチラ称号にするよう持ちかけるといっている。

このような状況を前提とすると、A氏の称号継承は紛争に発展していく可能性を大いに孕んでおり、彼を含めた近親者も事態を十分に熟知している。

第5節 ヴァカ・プロジェクト——「命を縮めないために」

A氏の生い立ちと、彼がメツア、政府官僚、ランガチラになっていく過程を一応時間的契機に従って追ってきた。このA氏のライフヒストリーを特徴づける一連の出来事は、彼の生涯に「起きたこと」であると同時に彼が生涯をかけて「起こしてきたこと」という視点から捉えていく必要がある。理想的な継承ラインにないA氏の語りの中には、「命を縮めないために」採られた一連の方策が見え隠れしている。例えば、有能なメツアである彼が政府官僚となること、そして有能な政府官僚である彼がランガチラとなることの各段階は、巧みな価値観の擦り合わせを孕んでいる。また、ランガチラとして彼が主体的に起こす諸々の行動は、一区域を越えた政府官僚としての新たな社会的評価を喚起する。そこには、ポリネシアの小島嶼国の新たなエリートであるA氏が、彼なりにグローバルな情勢を読んで地域社会を造り上げていく戦略的な意図があるように思われる。

A氏が正式にランガチラとなったのは1992年7月であるが、実はその4年前から政府上級官僚としての情報と人脈を利用して、ランガチラとなる布石が敷かれていた。その布石とは、彼がヴァカ・プロジェクト (Vaka Project) と呼ぶものであり、時間的には前後するが、親族会議での合意の背後にあったものを探るために幾分詳細にこれを検討してみる。

1965年に開かれた南太平洋委員会 (South Pacific Commission) の南太平洋会議 (South Pacific Conference) で「定期的な芸術祭を通じて南太平洋の伝統と文化が積極的に奨励・振興されるべきこと」が提唱され、それを受けて1972年にフィジーで第1回太平洋芸術祭 (Festival of Pacific Arts) が開催された。4年に一度のこの祭典はニュージーランド (第2回)、パプア・ニューギニア (第3回)、タヒチ (第4回)、オーストラリア (第5回) と順次開かれ、第6回開催地としてクック諸島ラロトンガ島に白羽の矢が立った (Government of the Cook Islands [1992], p. 8)。1988年に南太平洋会議の正式要請を受けたクック諸島政府は、92年10月16日から27日の開催を目標に政府内に芸術祭準備委員会を発足させた。また要請を受けた翌年の1989年1月に政府は民主党のププケ・ロボチ (Pupuke Robati) を首相とする連立政権からジョフリー・ヘンリー (Geoffrey Henry) を首相とするクック・アイランズ党政権に移行したが、芸術祭開催を睨んだ文化政策は継承された。この文化政策は単に文化・芸術の振興を奨励するだけではなく、新政府声明の中でこれを「文化の開発」と呼んで重要な施政方針の一つに位置づけた。さらに旧内務省文化担当部門を拡大したかたちで文化開発省 (Ministry of Cultural Development) が新設され、芸術祭に向けた体制が整えられていった (Ministry of Cultural Development [1991])。

A氏が芸術祭の件を耳にしたのは1988年の準備委員会に政府官僚の一人として出席したときであった。ちょうどその会議では第6回芸術祭を貫くコンセプトを何にするかが議論されたが、「偉大なる移住」(Great Migration) をメイン・テーマにヴァカ (カヌー)、航海、帰郷をキーワードとするイベントでそれを彩ることに落ち着いた。具体的にはクック諸島各島をはじめ参加各国の伝統的リーダーに要請してカヌーを建造してもらい、それを彼らが実際に操ってラロトンガに集結し芸術祭の開会を告げるという壮大な「ヴァカ・ページェント」が企画された。A氏もこれに心動かされるものがあったが、伝統的称号を有していないため彼にはカヌー作製の要請はこないだろうと考えた。そして既にクック諸島では遠洋航海用カヌーの建造技術は廃れてし

まっているが、これからは大型カヌー製作を指揮することが改めて伝統的リーダーの一つの資質として脚光を浴びることになるだろうとも予測した。

果たして、A氏は独自にカヌー造りに乗り出す決心をする。彼はアヴァチウに住む母方の親類で内閣官房の要職にあるM氏をこの仕事の重要なパートナーに選んだ。M氏も称号は持たないが有能なキアトであり、先の会議に臨席していた。A氏もM氏もカヌー造りの野望を胸に、その後の準備委員会では官僚として芸術祭のテーマを積極的に支持した。

1989年には自分のタペレのランガチラである母方のオジ(図4の④の人物)を口説いて臨席させ、彼の存在を権威づけとしてA氏は独自の準備会を重ねていく。彼はこれをヴァカ・プロジェクトと呼んで次第に組織的なものに仕立て上げていった。A氏はこのプロジェクトの目的を、カヌーを一つの「象徴」としてアヴァチウ、ルアトンガ周辺の八つのンガチを一つに纏めあげていくことだと説明する。そしてこの団結が導いていく先には「文化的価値、社会的価値、経済的価値、政治的価値」に基づく世界があるという。

プロジェクト準備委員会(Kumiti)は「山のランガチラ」である自分のオジと「海のランガチラ」保持者の2名を長として立て、その下に5名からなる理事委員会(Kumiti Trust)、4名からなる実行委員会(Kumiti 'Aka'aere)、16名からなる評議委員会(Mata o Nga Kōpū)を擁している。A氏は理事委員会と実行委員会の議長(Chairman)となり、M氏を補佐として「山のランガチラ」に近い四つのンガチから委員を人選した。評議委員会はプロジェクトの目付け役で、A氏がキアトを務めるンガチを除く七つのンガチから2ないし3名を選んで構成した。A氏は極めて巧みにこの地域の称号保持者を配して準備委員会を組織したわけである。

しかし、ここで疑問なのはアヴァチウ、ルアトンガを勢力下とするマケア・カリカ・アリキの扱い方である。アリキのヴァア・トゥアトゥアの任にある男性ランガチラは実行委員会と評議委員会に名を連ねているが、アリキ自身の名は含まれていない。ヴァア・トゥアトゥアの継承者は図4にあるようにA氏の比較的近親で、アリキとはむしろ疎遠である。A氏にこの件を尋

ねると、彼が後に継承したランガチラ称号とそれに率いられるンガチの歴史 (kōrero) を繙いて次のように説明した。

「19世紀前半にキリスト教が到来した頃、合意に基づいてマケア・カリカのヴァカに属するこのランガチラ称号が与えられた。しかしこのランガチラはどのアリキからも独立していたし、今もそうである。ンガチというよりアヴァチウには独自のヴァカがある。だから、アヴァチウの土地はこのランガチラとそのヴァカが所有するものであり、アリキには関係ない。1919年の土地法廷の議事録に明らかかなように。」

「1919年の議事録」とは、アヴァチウのある土地に対する相続権をめぐるアリキとランガチラの間起きた紛争に関するものである (Land Court [1919])。第4節の冒頭で触れたンガチの来歴に関する証言も同記録に載せられており、当時のニュージーランド人裁判官もこの語りを根拠にランガチラに分があると判決した。A氏の論拠はこの判例をランガチラの自治性にまで拡張したところにある。つまり、この判決はアリキに勝る「王」が存在することの証左であり、その「王」が率いるところはンガチではなくヴァカであるという解釈がここでは成り立っている。したがってこのヴァカ・プロジェクトにはもう一人の王は必要ないとA氏が判断したのである。

マケア・カリカ称号の保持者は80歳近い高齢の女性で、地域の政治=権力関係にあまり関心を示していない。また彼女は足元に目を向けるよりも、政府の諮問機関であるアリキ院 (House of Ariki) の議長を当時務め、太平洋芸術祭では政府の文化政策への取り組みを象徴する存在として桧舞台に登ることに夢中であった。そのためA氏の行動をあまり咎める様子もなく、彼には幸いであった。

1990年になってすぐに、プロジェクト準備委員会はカヌー建造に立ち上がる。彼らにとって一番問題であったのは、遠洋航海用カヌーとはどのようなもので、如何に造るのかということであった。A氏はその解決策をラロトンガの図書館で目にした1975年再版のハッドン (A. C. Haddon) とホーネル (James Hornell) のビショップ博物館紀要『オセアニアのカヌー』に求めた

(Haddon & Hornell [1975])。A氏は祖先の起源地をタヒチ辺りと考えていたので、この報告書のソサエティ諸島のページを繰り、その136ページに英国のジェイムズ・クック艦長(Captain James Cook)一行が1774年にタヒチで記録した戦闘用カヌー(*vaka tamaki*)の図面を発見した。タヒチから戦闘用カヌーを駆ってやって来た戦士の一団を再現することは、「偉大なる移住」のテーマに正に合致する選択であった。A氏はタヒチ人を母とするラロトンガの設計士G氏の応援を得て、この図面を読み、これからカヌーの設計図を作製した。計画ではカヌーは双胴で全長93フィート(28メートル)、200人が乗船可能である。船体には堅いマンゴ樹(*vi*)を使用することとし、早速切り出しと建材の乾燥に取りかかった。

また1990年にはこの大型カヌー建造の様々な実務に乗り出した。「このプロジェクトがかなり大がかりなものになることが分かってきたので、太平洋芸術祭に間に合わせるよりも、3年から5年かかっても正しい仕事をしたいと考えるようになった。初めから芸術祭云々よりも自分の近隣のンガチの結束を高めることにプロジェクトの思いがあるのだから」とA氏はいう。先ず理事委員会・実行委員会は「山のランガチラ」のマラエ(*marae*, 祭祀場)を作業場に選定しカヌー舎屋(*Te 'Ōrau*)を建設した。マラエ全体に対してカヌー舎屋は作業用マラエと呼ばれ、これは2階建てで、1階には93フィートの双胴カヌーが納まる広い作業場と準備委員会のオフィスが3室、2階には大部屋が2室造られた。マラエは「山のランガチラ」の土地で、そこに作業場を建てるのだから「海のランガチラ」に近いンガチの者を両委員会には加えなかったという。

次に継続的な資金と労働力の確保が問題となる。プロジェクト準備委員会内ではA氏が議長を務める理事委員会と実行委員会がこの二つの問題を扱うことになっていたが、これは政府官僚であるA氏が得意とするところである。労働力確保については原則的にアヴァチウ、ルアトンガの8ンガチの成員が無償で労働を提供することが前提だが、A氏のいる政府部局のかなりの数の職員が合法的に「地域労働奉仕のための有給休暇」を利用して動員された。

しかし、A氏の斡旋で当該部局に職を得たンガチ成員が多いために、この両者は実際にはかなり重複している。カヌーが出来上がるまでは、クック諸島政府の機能は停止していたと大げさに表現する人までいるほどであった。

資金確保の問題であるが、「無料の」労働力を差し引いたとしても、プロジェクトの総見積りはカヌー舎屋の建設費を含めて30万NZドルから50万NZドルに膨れ上がっている。これに対しては、大きく三つの財源に依存することで解決した。その三つとは、政府援助、寄付、富籤販売である。政府援助とは地域財政支援計画 (Community Cost Support Scheme) のことで、この財政的淵源を辿れば国民1人当たり1000NZドルを超えるニュージーランド政府からの海外援助資金に行きつく。先述の作業用マラエも実はプロジェクト終結後はA氏が主任を務める政府部局のオフィスとして使用することを前提に、政府が庁舎の名目で公的に建設したものである。また地域財政支援計画では政府から地域に対する技術支援を引き出すことも可能で、これはある程度の労働力確保にも繋がる。寄付であるが、これは各ンガチやリーダーからの供出金と海外に移住している親族からの送金によって成り立っている。A氏は送金は大した額ではなく、ほとんどがラロトンガの地域社会内で調達されたと強調するが、多くの移民の世話をしてきた経緯から相当額を得ていたことが推察される。最後の富籤販売は、ニュージーランドの影響でクック諸島でもロット(ビンゴ形式の数当てゲーム)が盛んなことから導入された資金調達方法である。理事委員会と実行委員会の主催で1991年にラロトンガで1回このロットを開き、売上総額8万3000NZドル、純益6万NZドルを上げた。政府援助と寄付によるヴァカ・プロジェクトへの投入資金の実額は明らかではないが、総見積り額に照らせば最低で20数万NZドルが賄われていたことになる。また、1992年に入ってからさらに追加資金が必要となった。その折、A氏は「山のランガチラ」のマラエの一面を配電盤設置のために1945年以来政府に無償で貸していることに気づき、これを公共用地として政府に供与する代りに47年分の借地料支払いを申し出ることを提案した。果たして、その申し出により、プロジェクトは2万NZドルを手に入れ、配電盤も新品に取り替

えられるという余祿もついた。

この一連の資金繰りには、A氏の能力が正に遺憾なく発揮されている。政府官僚としての人脉と知識、合法的措置を前提とした行動力は彼の非凡さを物語る。またメツアないシキアトとしての貢献から得た信頼がこれに相俟って継続的な人的資源の動員を可能にしている。大型カヌー建造を既成事実太平洋芸術祭に参加していくのは些か強引ではあるが、彼は作業用マラエで「カヌーは一つのモノであり、象徴的な問題でしかない。ここには常にもっと長期的に地域を育てていく問題、つまり地域開発 (community development) の問題があるのだ」というスピーチを繰り返し、合意を浸透させる努力も怠らなかつた。

カヌーは1992年9月下旬に徹夜の作業を続けてようやく完成した。A氏は作業の陣頭指揮と並行して、ヴァカ・プロジェクトの最終段階の手配を行った。詳述は避けるが、この最終段階とはカヌーの誕生を祝い、世に広く公表する3日間にわたる儀礼のことである⁽⁷⁾。A氏は実行委員会の議長としてこれを9月23日から25日にかけて行うことに決定し、第1日目はカヌー浄化進水儀礼 (*'Akamā'inu'anga te Vaka*)、第2日目は贈答・投錨儀礼 (*Kave'anga Kura*)、第3日目はカヌー舎屋開所儀礼 (*Tomo'anga te 'Ōrau*) を盛大に挙行することにした。そしてカヌー完成までの間にそれ以上に重大な二つの展開があった。第1は親族会議の合意を経て、1992年7月12日にA氏がランガチラ称号を継承したことであり、第2はヴァカ・プロジェクトが第6回太平洋芸術祭のイベントとして正式に組み入れられたことである。

称号継承の可能性を意識せずに、A氏がカヌー建造を決意したとは単純に考え難い。また、それ以前に政府官僚としての地位を得た時点でこの意識が胚胎していたとも考えられる。しかし、母方のオジの意向をうまくとりつけても、ただ政府官僚というだけでは、親族会議において継承規則を盾にとる親族から強い反発が出てくることは必至である。したがってヴァカ・プロジェクトが地域で承認され実行に移されたことは彼にとって絶好の機会であった。プロジェクトでは地域の結束を強調し、名目上はオジを立てて一歩

身を引きながらもプロジェクトの実行において「王の振舞い」を強烈にアピールすることができた。A氏の称号継承にまつわる不安定要因よりも、カヌー建造の共同労働において親族たちに身体化された「王としての彼に接する意識と態度」が勝ったのである。またプロジェクトを完遂することは称号を得てから「命を縮めないため」にも重要なことであった。いずれにせよヴァカ・プロジェクトにおいてA氏のメツアと政府官僚としての社会関係資本は相互に呼応しつつランガチラとしての彼を造り上げていった。

またマケア・カリカ・アリキを除いてプロジェクトが進行したことを既成事実、A氏はランガチラの独自性と自治性を強調するさらに二つの行動を強行する。先ず称号叙位式において、A氏に同意してヴァカ・プロジェクトを推進したM氏を自分のヴァア・トゥアトゥアとして任命した。ヴァア・トゥアトゥアはアリキのみが任命して抱えられる「声」であり、正式な場では一切発声を許されないアリキに成り代わってその意向を周知させる重要な責務を負う。したがって、この「声」をもつことでA氏は自分が正に王であることを宣言したのである。叙位式の会場には動揺が走ったが、その場では積極的な反発は生じなかった。A氏がアリキに匹敵する王であるとすれば、彼の周囲のンガチのキアトたちもその社会的地位が相対的に上昇して称号にありつく可能性がでてくるのである。9月23日から25日にかけてのカヌー儀礼では、早速M氏がA氏の「声」として進行一切を仕切ることになった。

A氏の第2の行動は、ヴァカ・プロジェクトが太平洋芸術祭のイベントに組み込まれたことに関連する。芸術祭のヴァカ・ページェントでは各国・各地域のカヌーがラロトンガ島東岸のンガタンギア(Ngatangiia)に入港し、期間中そこに展示されることが企画された。A氏のカヌーはもともと政府の正式要請を受けて芸術祭のために建造されたものではない。しかしクック諸島随一のカヌーが形を成してくるにつれて、政府と文化開発省から芸術祭への正式参加が求められた。もちろんA氏から首相への積極的な働きかけもあった。そのうえで、ヴァカ・プロジェクトのカヌー儀礼では1日目にカヌーを作業用マラエから1.5キロほど離れたアヴァルア港まで運んで進水し、

2日目にンガタンギイアのあるタキトゥムのカイヌク・アリキとパ・アリキに贈答をして、錨石をそこに投げ込む正式許可を得る予定を組んだ。9月24日の贈答・投錨儀礼当日、A氏は豚、鶏、タロ、バナナの供物を2セット用意し、早朝にトラック数台を連ねて作業用マラエを出発した。先ずパ・アリキのヴァカにさしかかったところでパとそのヴァア・トゥアトゥアが道を塞ぎ、A氏とM氏が車から降りて彼らに対峙する。パとA氏は黙ったまま、その前でヴァア・トゥアトゥア同士の問答が交わされる。贈答と表敬に訪れた意が通じるとトラックから道に供物を列べ、一行は歩いてンガタンギイアへ向かう。港の入り口にはここを直接の勢力下におくカイヌク・アリキのヴァア・トゥアトゥアが待ちかまえ、先程と同じ問答を繰り返す。許可を得ると、A氏とM氏を先頭に供物を抱えた一団がカイヌクの前に進み、贈答と投錨の意向をヴァア・トゥアトゥアを介して伝える。いくぶん省略してあるが、この一連の行動で注目されるのはA氏と2名のアリキがヴァア・トゥアトゥアを介して対等に接触する点である。本来ならA氏はマケア・カリカを介してパとカイヌクに接するべきだが、彼女の姿はなかった。

カヌー儀礼の3日目にはカヌー舎屋の開所儀礼が行われたが、そこにはマケア・カリカを含むラロトンガの全アリキ夫妻、ヘンリー首相夫妻ほか各国駐在公使も臨席し、1000名を超す参列者に食物が振舞われた。ヴァカ・プロジェクトはそのクライマックスにおいて太平洋芸術祭に向けて意気高揚するラロトンガの人々を確かに引き付け、同時に1カ月後に迫った一大イベントへの盛り上りを一層強くした。そしてクック諸島政府の要人とアリキたちが前日までの暴挙を容認しつつA氏の招待を受けて来臨したことで、カヌー儀礼はラロトンガを代表する「伝統的」リーダーの出現を国家的規模で承認し祝う場にもなった。いうなれば、これがA氏にとってのヴァカ・プロジェクト最大の実利的目的であり、最大の成果であったともいえる。

第6節 アヴァイキの夢

芸術祭の翌年、あるンガチ成員の葬儀に際してA氏が奮闘する姿を私は目に止めた。葬儀一切を取り仕切り、埋葬作業に必要な15人分の労働力を例の「地域労働奉仕のための有給休暇」で確保し、自らもスコップを手に額に汗していた。葬儀が一段落した折、彼は「ラロトンガではスピーチが上手く、人を魅了することが大事なことなのだ」といい、「ランガチラになってからはヴァア・トゥアトゥアがいるから人前で話もできなくなった」と私にぼやいた。そして「今度は政府役人として声を出していくしかないな」と続けて、ランガチラとして国政に関与していこうとする思いを語り始めた。彼が次にどの職位を目標にしているのかは分からないが、彼の語りにはアヴァイキなる表現でクック諸島の将来像が納められていた。

アヴァイキ (*'Avaiki*) とはクック諸島マオリにとっての遙かなる祖先の地を意味する (Savage [1980], p. 56)。それはポリネシア人の偉大な起源地、航海と移住が繰り返された道程と広がりそのもの (*'Avaiki te varinga nui*) を指し、また死後に精霊として戻って行く場所、祖先たちの住処を指す (Gill [1989], pp. 16-22)。クック諸島以外のポリネシアにも広く類例が認められるこの語は、一般的には「地上のある方向の一点の島に求められる他界」あるいは「理想化された父祖出自の地」であるとされる (棚瀬 [1966], pp. 408-409)。

しかし単純に他界観念の類例としてのみアヴァイキを捉えることはできない。ラロトンガ島東部タキトゥム出身でかつて首相を務めたトム・デーヴィス卿 (Sir Thomas R. A. H. Davis) はその自伝で次のように述べている。

「ポリネシア人はどこから来たのか。この問いをポリネシア人にすれば、その答えは普通、『ここから』である。……そして自分のホームランドから離れているポリネシア人が、故郷を指してアヴァイキと呼ぶのが最も明快に得られる答えである。つまり自分たちが来た場所という意味で。それを

そのまま解釈することも、[人類学者のように]そこから何か引き出してくることもできる。ポリネシア人は皆自分が生まれ、あるいはそこから来たという地をアヴァイキの語で呼ぶために、その地は人が定着しそこから次の定着段階を進めていく処である可能性が強い。」(Davis [1992a], pp.53-54)

デーヴィスにとって、ラロトンガにおけるアヴァイキは他界であるよりも起源地・出生地であり、彼岸であるよりも此岸の意味を強く込めた言葉である。そして死よりも生に結び付けられている。また彼は医師としてオークランド、シドニー、ボストンで研鑽を重ねたが、その帰郷の途でアヴァイキとしてのラロトンガの意味づけが自分の中に喚起されてくる様を記述している(Davis [1992a], p. 219)。それによれば、古来ポリネシアにはラロトンガ、ライアテア (Ra'iatea)、ヌクヒヴァ (Nuku Hiva) の三つのセンターがあり、各々アヴァイキ・ラロ ('Avaiki Raro)、アヴァイキ・ヌイ ('Avaiki Nui)、アヴァイキ・ルンガ ('Avaiki Runga) と呼ばれた⁽⁶⁾。これら三つは地域文化、宗教、経済的発展の中心として周囲に影響を及ぼし、その人々は伝統の自信に溢れ、日々の生活が依って立つ規則を誇りとしてきた。続いて出版された彼の小説『ヴァカ』においてもこのアヴァイキへの思いを基調にクック諸島マオリの大航海が描かれている (Davis [1992b])。

デーヴィスはA氏とは反対に「道に出て王になった」男である。そして首相職を経て半生を振り返り、アヴァイキ概念でラロトンガを捉えたわけである。彼の表現にはロマンチズムも含まれるのだが、実証的にそのアヴァイキ概念の捉え方を批判することはあまり意味がない。むしろアヴァイキ概念のイデオロムとしての利用に着目する必要がある。彼はかつて「ラロトンガ人の父祖の土地として老人たちがよく口にしたアヴァイキ」(Rere [1991], p. 2) についてではなく、祖先が大航海の末に辿り着いたユートピアとしてのアヴァイキ (=ラロトンガ) について語っている。別言すれば、海外での長期にわたる生活の末に帰還し、首相として国を造っていったという自負に重ね合わせながら、理念的に描かれる海洋島嶼国家の原像をアヴァイキという言葉に映し出しているのだ。

デーヴィスから直接的な薫陶を得ていたか否かは定かではないが、A氏は政府官僚として彼と仕事を共にしていた。そしてA氏がマオリとして当該部局初の主任職に任命されたのはデーヴィスが首相を務めていたときである。「道に出て王になった男」と「動かなかった男」はラロトンガを舞台に極めて対極的な人生の軌跡を描いてきた。しかし軌を一にするかのように、デーヴィスはアヴァイキ概念に国家の理念像を求め、A氏はアヴァイキ概念を指針として将来の社会と国家の姿を見極めようとしている。墓地の傍らで、A氏はアヴァイキ概念を用いて次のように話を進めた。

「昔祖先がカヌーを操ってアヴァイキからラロトンガにやって来た。アヴァイキは祖先の土地のことで、アヴァイキとラロトンガはテレ（遠洋航海）で結ばれていた。しかし、クック諸島がニュージーランドの植民地となってからは人々の関心は祖先の土地であるアヴァイキではなく、ニュージーランドへと移っていった。靈魂が夕日の方向へ逃げてアヴァイキに辿り着き、安らかな生活にありつくなら、人々はニュージーランドへテレ（移住）して金にありついた。」

A氏はニュージーランドへの労働移住が盛んになり、ラロトンガとの間に頻繁な往復が繰り返されるにつれてクック諸島マオリの社会は散り散りになり、永年のヨーロッパ文化流入の前にマオリ文化の根となる存在 (*tumu kōrero māori*) もなくなってきたという。ニュージーランドに渡って長いもので3世代を超えるクック諸島マオリ移民はその多くがニュージーランド生まれであり、英語は話せるがマオリ語は話せない。人口重心地も彼の地に移ってしまった。つまり、デーヴィスが捉えるような生に溢れる土地としてのアヴァイキはラロトンガではなく、ニュージーランドを指すものと考えられるようになってしまった。

A氏の考えではラロトンガはアヴァイキではない。そしてクック諸島の将来は如何にラロトンガにアヴァイキを復活させるかにかかっている。今のラロトンガは「暗闇のアヴァイキ」(*'Avaiki te Pō*) である。それは「蕾のアヴァイキ」(*'Avaiki te Pua*) を経て「光のアヴァイキ」(*'Avaiki te Māramarama*)

に到達しなければならない。そして暗闇から光への一連の過程にA氏は自分のヴァカ・プロジェクトを位置づけようとしている。

ヴァカ・プロジェクトは太平洋芸術祭を背景にA氏の個人的利益も絡んで実行されたが、長期的な地域開発とンガチの結束も常に強調された。そして「偉大なる移住」のテーマのもと、結束の結晶であるA氏のカヌーは南太平洋各地からのカヌーを率いてラロトンガに「帰郷」を果たした。芸術祭が太平洋における文化と伝統の核を象徴するとすれば、テレ（航海）を経て人々が集結し芸術祭が開催されたラロトンガは一時期なりとも正にデーヴィスが指摘する意味でのアヴァイキを具現化したことになる。

またA氏の意図とは裏腹に、クック諸島はニュージーランドに移住した者にとってもアヴァイキとしての意味づけを復活させつつある。第4節で簡単に触れているが、ニュージーランド・オーストラリア経済が1980年代から90年代初頭に年平均成長率約1%にとどまる低迷を続け、未熟練労働者の平均所得が相当な低下をみせ、大量の解雇者を生み出したことを背景に、多くの移民がクック諸島への帰還を考え始めている。MIRAB社会として成熟期にあるクック諸島はニュージーランドに恒常的に労働市場を求め、海外援助と移民からの送金で今まで国家経済を成立させてきた。しかし、彼らの多くは貯蓄をクック諸島に持ち帰って自分たちの家屋の建設費用に充てるなど、個人的投資の時代に転換している。移民の送金行為を直接読み取ることは難しいが、海外発行送金為替の換金件数は1987年以降大幅な減少をみせ、87年に1万914件（264万7000NZドル）、88年に8400件（212万3000NZドル）、90年に4359件（143万7000NZドル）と下降している。また住宅建設許可申請は正式受理分だけでも1990年以降は年間70件近く、建材をはじめ諸物価も高騰の兆しをみせている（Cook Islands Statistics Office [1992]）。さらに、政府土地法廷に提出される宅地用土地占有権（occupation right）の訴訟件数も上昇を続けるなど、労働移民の帰還が関係する様々な社会経済的動向が看取される⁽⁹⁾。1993年のニュージーランド政府の年金受給資格変更もこれに拍車をかけ、91年のセンサスで1万8617人であったクック諸島人口は、94年の中間年人口推

計で2万2286人と大幅な社会増を記録した (Crocombe & Crocombe [n. d.])。

それなりの金銭を蓄えた移民にとってクック諸島のラロトンガは先ず何より父祖の地であり、厳しい労働も強いられずに都市的な娯楽もそれなりに楽しめるユートピア、つまりアヴァイキ以外の何物でもない。芸術祭には移民の多数も一時帰国して華やかなラロトンガのイベントに酔いしれたが、この光景も彼らのアヴァイキ観に影響したかもしれない。ニュージーランドに36年間生活しているあるラロトンガ出身の女性は、ニュージーランドに来てラロトンガの生活の根を断ち切った (エケ, 'eke) わけではなく、長いテレの末にいずれは出立の地に帰ることを願っていると語った (棚橋 [1993], pp. 8-9)。テレによって「道」に出た彼女が最終的に目指すのは父祖・出生の地としてのラロトンガ、つまりアヴァイキである。しかし、このテレ (帰還) には諸手を上げての歓喜が待ちかまえているわけではない。かつて送金によって親族を支えた移民も、マオリ文化の根を失った者、土地紛争を引き起こす者として烙印を押され、社会的結束を脅かす不安の種とされている。現首相もニュージーランドからの帰還者がラロトンガの環境破壊を引き起こすと言いつ放った (*Cook Islands News* [1992])。帰還者に対して「お前は道に出て王になった」という表現が浴びせられることもある。この場合は、彼らはニュージーランドに行き金も土地も手に入れて自分なりの生活を築いて王となったのだから、ラロトンガに戻ってきて残った我々のやり方に口を挟まないで欲しいという皮肉が込められている。

政府官僚のA氏はポストMIRABプロセスとでも呼びうる移民の趨勢を熟知しているが、ランガチラとしての彼の双肩にはこれから大挙して帰還してくる移民を自分が率いる地域で如何に吸収するかというマイクロな問題の解決がかかってくる。A氏が描くアヴァイキとしてのラロトンガの将来像は、ヴァカ・プロジェクトによってその一部が具現化された。しかし、そこには帰還者の抱くアヴァイキ観を包摂する余地があるのだろうか。あるいは「動かなかった」ことで展開されてきた彼の戦略が「道に出た者」に通用するの

であろうか。MIRAB社会として移民経済の成熟期を迎えたクック諸島マオリの生活世界においては、母社会を足場に形成される国家観と、ニュージーランドの移民社会を足場に形成される国家観がせめぎ合っている。そして多くの者が母社会とニュージーランドとの間の物理的・精神的往復運動を繰り返して人生の軌跡を描いてきているために、この二つの国家観は全く遊離した視点として社会的対立を生み出すよりも、個々のクック諸島マオリの内に同衾する「天使と悪魔」を生み出しつつあるように思われる。

国の将来の方向性を占うかのように、1994年3月24日クック諸島では総選挙と国民投票が行われた(Crocombe & Crocombe [n.d.])。総選挙についてはジョフリー・ヘンリー率いるクック・アイランズ党が25議席中20議席を確保した。しかし有効投票中クック・アイランズ党が獲得したのは54%にすぎず、辛うじて現政権が存続を保った。史上初の国民投票では、国名の変更、国旗の変更、国歌の変更、国会の海外在住者議席(Overseas Seat)の存続、議員任期の変更の5項目について国民の審判が仰がれた。結果は国名・国旗・国歌の変更はせず、在外者議席を存続し議員任期を3年ないし4年に短縮することに決定した⁽¹⁰⁾。このとき、クック・アイランズ党がクック諸島に代わる名称として候補にあげていたのは、デーヴィスやA氏も口にしたアヴァイキないしアヴァイキ・ヌイである。クック諸島マオリには現名称への反発はあるのだが、観光を基幹産業とするためか国名変更には踏み切れずにアヴァイキを拒否することに決着した。アヴァイキという国家観自体の全面的否定ではないにしろ、「動かなかった男」が抱くアヴァイキの夢と帰還者が抱くアヴァイキの夢が全く正反対の結末を以て曙光を迎える可能性を予測させる結果であった。

第7節 結 語

本章では、MIRAB社会論で指摘された移民・送金・援助・官僚制度を手

掛かりに、A氏のライフヒストリーを追ってきた。大量の移民が出ていくなかで「動かなかった」この男は、動かないという選択故にMIRABプロセスの只中にあるクック諸島のラロトンガ社会で中心的役割を担うようになった。親族の労働移民を支援することで信頼を得てメツアとなり、新興国家におけるレント型収入依存体制の中で食欲に生きて上級官僚となった。さらには官僚として培った人脈・情報・手腕を梃子として多面的に活用し、太平洋芸術祭という国際的イベントをヴァカ・プロジェクトとして地域に取り込み、一介のメツアからランガチラ称号を勝ち得た。移民・送金・援助・官僚制度の諸要素を巧みに紡いでいくA氏存在によって、彼の周辺の地域社会に引き付けられた国家の政治的脈絡とグローバルな社会経済的脈絡は当該地域内の社会＝文化的転換を喚起した。そこに起こった出来事は「新たな伝統主義」と称するに相応しいようなものである。

マーカス (G. E. Marcus) が1970年代トンガ社会 (Tonga) のエリート層形成の研究で具体的に示したように、太平洋の小島嶼国家には二つの顔がある (Marcus [1981], p. 62)。一つは文字どおり小さな国民国家としての顔であり、もう一つは越境し国際化する人間集団としての顔である。クック諸島においても大量の労働移民によって母社会が縮小するなかで、ホームランド自体の持つ政治的・経済的重要性も相対化され、社会的重要性も縮小しているかにみえる。しかし、A氏の場合を通してみると、この二つの顔は選択的な社会的資源として関連づけられ、母社会の新しいエリート層形成に寄与していることが分かる。

A氏は植民地的状況に起源するMIRAB社会の4要素と太平洋芸術祭を戦略的に利用して、ヴァカ・プロジェクトで「伝統的価値」を地域社会に喚起したが、この事例は4要素を巧みに利用すること自体が既に慣習化された指導者の行為の範疇に入るものであり、称号獲得のための正統な戦略的実践として認識されている事実を明らかにしている。「伝統」を風化させた外的要素に基づく行為が、逆説的に「伝統復権」の可能性を創出したこと自体注目に値するし、これをMIRAB社会のアイロニーと呼ぶこともできよう。しかしA

氏が引き起こした一連の出来事は、単純な伝統と近代の二分法では納まりきらない複合的な文化戦略の存在に着目する必要性を示唆している。

クック諸島をはじめとするポリネシアのMIRAB社会は今、「場」の文化的アイデンティティーを喪失したディアスポラ (diaspora) の状態にあるといわれる (Clifford [1994])。確かにマーカスが1970年代トンガの研究で示唆したように、ポリネシアという「周辺の周辺」 (extreme periphery) にいるエリートたちは、「場」の文化的アイデンティティーよりも「分散と連繋」の文化的アイデンティティーを前提に、多角的な社会関係が国民国家の境界線を紡ぎだす現実を強く意識し行動している。その指摘に合致するように、A氏が母社会に居ながら越境し国際化する人的資源を含むMIRABプロセスの諸要素を利用して、「ディアスポラの政治経済学」を実践に移した過程がそのライフヒストリーには示されている。しかし、1990年代に出現したA氏の「ディアスポラの政治経済学」はマーカスの指摘に一步先んじて、改めてラロトンガの「分散」する社会体制が「場」に収束していく気配を敏感に察知している。

1965年の自治権獲得以降、クック諸島には国民国家の政体に伝統的称号保持者を如何に組み入れていくのかという問題が絶えず付きまどってきた。称号保持者は植民地化以前の過去と自治権獲得後の現在の連続性を象徴する存在として受け取られる一方、政府にとっては民主主義を浸食する存在でもある。シソズ (J. Sissons) は、国家政体内に伝統的称号を取り込む過程はより広い国家建設プロジェクトの下位プロセスとしてクック諸島の政治変動に密接に対応していると観察する (Sissons [1994], pp. 372-373)。1965年に初代首相アルバート・ヘンリーとクック・アイランズ党はアリキの社会的認知と復権を公約し、同時に彼らの世俗的実権を巧妙に剝奪することで新興国家の政治基盤を造り上げた。一方、象徴的存在に飽きたらないアリキたちはその後民主党と結託してその実権回復を目論んだ。1989年以降のジョフリー・ヘンリー政権下では太平洋芸術祭を起爆剤とする観光産業の急速な拡張が実現するなか、地域固有の伝統が商品化とともに再評価され、それまで政治過程から排除されてきたマタイアポ、ランガチラなどの下位の称号保持者も国家

プロットに参画しつつ新たな熱意を以て地域政治での役割を拡大してきている (Ingram [1992])。そして、A氏が官僚としての居場所を確保し、さらにランガチラとなった政治的背景も正にそこにある。

しかし、称号保持者は常に一方的に国家に巻き込まれてきたのだろうか。A氏のライフヒストリーとヴァカ・プロジェクトを見る限りは、国家のプロットが逆に下位プロセスであるはずの地域政治に引き込まれ、地域が国家の文化的空間を定義する中心的役割を果たし、地域の自律性の意識が芽生え始めていることが指摘される。そして政府官僚でありランガチラでもある一地域指導者の語りと実践が国家的アイデンティティーの転換の問題に極めて複雑に結び付いている現実がそこにある。シソズは国家の政治状況を捉えるときにMIRABプロセスを全く考慮していないけれども、移民の流れを把握して戦略的に利用しえるのはA氏のような地域指導者であり、強権発動を除いて国家にはそれを統制することができない。それゆえに、様々な社会変化を眼前に、「場」への収束を察知してA氏の中に形を成しはじめているアヴァイキの国家観は、「伝統復権」に基づく「場」の復活を模索するようなMIRAB社会のアイロニーであると単純には喝破できない。それは社会不安に抗する結束回復に加えて帰還者の文化的排除の志向も絡み、むしろマクロなポストMIRABプロセスを睨んで敢えて提言された「アヴァイキの未来学」であり、政府や観光のアジェンダとは幾分異なるモーメントを有するマオリ・アイデンティティーの萌芽として読まれる必要がある。

[注]

- (1) 本章は文部省科学研究費補助金国際学術研究「オセアニア島嶼国家における海外移住・出稼ぎに関する民族学的研究」(代表：須藤健一，課題番号04041117)，同奨励研究(A)「クック諸島の近代化過程における『文化の開発』概念に関する歴史人類学的研究」(代表：棚橋訓，課題番号05710194)，および同奨励研究(A)「ポリネシア・クック諸島における国際的労働移動と世帯生計戦略に関する民族学的研究」(代表：棚橋訓，課題番号07710224)による研究成果の一部である。分析資料は平成4年度から6年度にクック諸島ラロトンガ島およびニュージーランドで継続実施した現地調査に基づいている。A氏をはじめと

- して貴重な時間を割いて調査にご協力頂いたラロトンガの方々には記して深謝する次第である。また調査研究の過程でご指導頂いた須藤健一先生、清水昭俊先生、片山一道先生、山本真鳥先生、前川啓治先生、遠藤央先生には記して謝意を表したい。
- (2) クック諸島の人々の自称はマオリ (*Māori*) ないしイチ・タンガタ・マオリ (*'Ihi Tangata Māori*) である。言語的にはポリネシア語系だが、島ごとの偏差もかなりあるため現在はラロトンガのマオリ語 (*Tuatua Māori o Rarotonga*) を標準語としている。公用語は英語。
 - (3) 「伝統的なもの」と訳出した表現は原語では「闇夜からのもの」の意。通常、「闇夜」(*pō*) とはキリスト教到来以前、精霊の支配する世界を指す。「新しいもの」と訳出した表現の原義は「増やす、大きくする」。
 - (4) ラロトンガン・マオリ語の原表現は“*Mē rave koe i te tā'onga, kā 'akapoto ia tō'u oranga (= ora'anga)*”。
 - (5) ラロトンガン・マオリ語の原表現は“*Rangatira kitea ara*”。
 - (6) 実名は伏せてあるが、このA氏が継承したランガチラ称号も、彼に率いられるンガチの固有名も戦士の末裔を意味する古語である。
 - (7) 本章での詳述は紙幅の関係上避けるが、A氏とM氏により立案された3日間にわたるカヌー儀礼の詳細については別稿を準備中である。
 - (8) ライアテアは、中部南太平洋のフランス領ポリネシアの中心であるソサエティ諸島に位置する島。ラロトンガの北東方向にあたる。ヌクヒヴァはフランス領ポリネシアの北東端にあるマルケサス諸島 (*Marquesas*) に属する島。アヴァイキ・ラロは「下 (南) のアヴァイキ」、アヴァイキ・ヌイは「偉大なアヴァイキ」、アヴァイキ・ルンガは「上 (北) のアヴァイキ」を各々意味する。
 - (9) ラロトンガの表敬行動を示す表現の一つに、「私のところに戻って来る時は、ラグーンのところからひれ伏して這ってこい」(*Totoro mai koe, nā runga 'itae ākau*) という言い回しがある。ニュージーランド在住者や帰還者は親族会議で土地用益権承認の合意を取り付けるという作法を省き、弁護士を介して土地法廷に直接提訴する場合は現在多いため、常識を欠くと批判される。また「ひれ伏して」請願せずに権利を主張する行為は白人 (*papa'a*) の行為であるといわれる。
 - (10) 同時に行われた総選挙の投票率が86%であったのに対して、国民投票の投票率は60%にとどまった。国民投票の結果は以下のとおりである。(1)国名変更＝賛成1723票、反対3984票、(2)国旗変更＝賛成2548票、反対2805票、(3)国歌変更＝賛成1141票、反対4623票、(4)海外在住者議席の廃止＝賛成2554票、反対3322票、(5)議員任期の短縮＝賛成3566票、反対2559票 (*Crocombe & Crocombe [n.d.]*)。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

- 佐藤元彦 [1993], 「オセアニア島嶼国の『レント収入依存型』経済的自立」(清水昭俊・吉岡政徳編『オセアニア③—近代に生きる—』東京大学出版会)。
- 棚瀬襄爾 [1966], 『他界観念の原始形態—オセアニアを中心として—』(京都大学東南アジア研究双書 1) 中西印刷。
- 棚橋訓 [1993], 「オークランドのロリークック諸島マオリの海外移住調査から—」(『日本オセアニア学会Newsletter』No. 47)。
- 近森正編 [1990], 『クック諸島—人間と先史社会—』(民族学考古学研究室小報 7) 慶應義塾大学文学部。

〈外国語文献〉

- Bellam, M. [1981], *The Citrus Colony: New Zealand-Cook Islands Economic Relations*, Wellington: New Zealand Coalition for Trade and Development.
- Belshaw, H. & V.D. Stace [1955], *A Programme for Economic Development in the Cook Islands*, Wellington: New Zealand Government Printing.
- Bertram, I. G. [1986], “‘Sustainable Development’ in Pacific Micro-economies,” *World Development*, Vol. 14, No. 7.
- Bertram, I.G. & R.F. Watters [1985], “The MIRAB Economy in South Pacific Microstates,” *Pacific Viewpoint*, Vol. 26, No. 3.
- [1986], “The MIRAB Process: Earlier Analyses in Context,” *Pacific Viewpoint*, Vol. 27, No. 1.
- Clifford, J. [1994], “Diaspora,” *Cultural Anthropology*, Vol. 9, No. 3.
- Cook Islands News* [1992], “Returning Islanders Could Spoil Country,” Sept. 16, 1992.
- Cook Islands Statistics Office [various years], *Cook Islands Quarterly Statistical Bulletin*, Rarotonga: Statistics Office.
- Crocombe, R. [1962], “Development and Regression in New Zealand’s Island Territories,” *Pacific Viewpoint*, Vol. 3, No. 2.
- [1964], *Land Tenure in the Cook Islands*, Melbourne: Oxford University Press.
- [1989], *The South Pacific: An Introduction*, 5th rev. ed., Suva: University of the South Pacific.
- Crocombe, R. & M. Crocombe [n.d.], “The Cook Islands, July 1992 - June 1994,” Typescript.

- Crocombe, R. et al. eds. [1992], *Culture and Democracy in the South Pacific*, Suva: University of the South Pacific.
- Cumberland, K. B. [1954], *Southwest Pacific*, Christchurch: Whitcombe and Tombs.
- Curson, P.H. [1973], "The Migration of Cook Islanders to New Zealand," *South Pacific Commission Bulletin*, No. 23.
- Davis, T. [1992a], *Island Boy: An Autobiography*, Suva: University of the South Pacific.
- [1992b], *Vaka: Saga of a Polynesian Canoe*, Suva and Rarotonga: University of the South Pacific.
- Gardiner, W. [1992], *Te Mura o te Ahi: The Story of the Maori Battalion*, Auckland: Reed.
- Gill, W.W. [1989], *Cook Islands Custom*, Suva: University of the South Pacific.
- Gilson, R. [1980], *The Cook Islands, 1820-1950*, Wellington: Victoria University Press.
- Government of the Cook Islands [1992], *Official Guide: Sixth Festival of Pacific Arts*, Rarotonga.
- Haddon, A.C. & J. Hornell [1975], *Canoes of Oceania* (B.P. Bishop Museum Special Publication No. 27-29.), rep., Honolulu: Bishop Museum Press.
- Hooper, A. [1993], "The MIRAB Transition in Fakaofu, Tokelau," *Pacific Viewpoint*, Vol. 34, No. 2.
- Hooper, A. et al. eds. [1987], *Class and Culture in the South Pacific*, Suva: University of the South Pacific.
- Ingram, T. [1992], "The Culture of Politics and the Politicization of Culture in the Cook Islands," in R. Crocombe et al. eds. [1992].
- Johnston, K.M. [1967], *Village Agriculture in Aitutaki, Cook Islands* (Pacific Viewpoint Monograph No. 1), Wellington: Victoria University.
- Land Court [various years], *Minute Book*, Rarotonga: Cook Islands Government Ministry of Justice and Land.
- Marcus, G.E. [1981], "Power on the Extreme Periphery: The Perspective of Tongan Elites in the Modern World System," *Pacific Viewpoint*, Vol. 22, No. 1.
- Ministry of Cultural Development [1991], *Introduction to Ministry of Cultural Development*, Rarotonga: Government of the Cook Islands.

- New Zealand Department of Statistics [various years], *Pacific Island Population and Dwellings*, Wellington: New Zealand Department of Statistics.
- Rere, T. [1991], *History of Rarotonga: Up to 1853*, Rarotonga.
- Savage, S. [1980], *A Dictionary of the Maori Language of Rarotonga*, Suva: University of the South Pacific.
- Sissons, J. [1994], "Royal Backbone and Body Politic: Aristocratic Titles and Cook Islands Nationalism since Self-Government," *Contemporary Pacific*, Vol. 6, No. 2.
- Watters, R. [1987], "MIRAB Societies and Bureaucratic Elites," in Hooper et al. eds. [1987].